

インバウンド受け入れが鍵となる、サイクルツーリズムの未来

道内でもいち早くサイクルツーリズムの可能性に着目し、インバウンド向け観光事業をリードしてきたニセコ。その立役者の一人であり、国土交通省が進めるナショナルサイクルルート検討小委員会の委員も務める、株式会社ARCH(アーチ)・ヒーロー北海道の代表取締役社長 高橋幸博さんに、サイクルツーリズムから見た北海道の可能性についてお話を伺った。



株式会社ARCH(アーチ)・ヒーロー北海道
代表取締役社長
一般社団法人 北海道サイクルツーリズム
推進協会 代表理事

高橋 幸博 氏

インバウンドを呼び込みたい

ここ20年程でインバウンドが激増し、国内屈指のリゾート地として注目を集めているニセコ。冬は究極のパウダースノーを求める外国人スキー客で溢れ返るリゾート地として定着したが、近年は夏場のサイクルツーリズムも盛況で、サイクリングを目的として国内外からニセコを訪れる観光客が増えているという(写真1)。

さらに「ニセコクラシック」「ニセコHANAZONOヒルクライム」など世界各国から選手がエントリーする自転車ロードレースも毎年開催され、海外のサイクリスト達から熱い視線を浴びているようだ。

もちろん観光客だけではなく日常的にサイクルスポーツを楽しむ地域住民も増えており、自転車愛好者同士の交流も広がっている。

その仕掛け人の一人が株式会社ARCH(アーチ)・ヒーロー北海道の代表取締役社長、高橋幸博さんである。ニセコを訪れるインバウンドに向け、冬場はスキー、夏場はサイクリングをメインとしたスポーツツーリズムのコーディネートを手がけ、その蓄積したノウハウをベースに、道内・国内各地で地域振興のためのツーリズムコンサルティングも行っている(写真2)。

「北海道には海外のサイクリストが憧れる要素が数え切れないほどあります。湿度が低く、快適な夏場の環境、景観の素晴らしさ、快適なロングライド、食の楽しみも大きいですね。私が拠点としているニセコには、羊蹄山をぐるっと一周できるルートがあり、京極や真狩など羊蹄山麓の湧き水を味わえるスポットも外国人に人気です。おいしい



写真1 ニセコ町内を走り抜ける、インバウンドのサイクルツアー



写真2 各地の自治体で、地域活性化やインバウンド、人材育成をテーマに講習会を開催

い牛乳やソフトクリームがあって、農景観を楽しめる農道も充実している。実は自転車レースの最高峰、ツール・ド・フランスもやはり農景観や地方の食をうまく取り入れており、ワイナリーや牧草ロール、小麦畑などの景色を楽しめるコースになっているんです。北海道には、それに匹敵する魅力があるにも関わらず、国内外のサイクルツーリストに向けてうまく発信できていません。地域のブランディングとPRがこれからの課題だと感じています」

ニセコの夏のレジャーとしてサイクリングが定着してきたのは、高橋さんをはじめ、コンドミニアムのオーナーなど観光産業の事業者たちの努力が実を結んだことにある。冬はスキー客で賑わうリゾート地は、観光客が激減するグリーンシーズンとの落差が激しかった。この夏場を何とかしなければと着目したのが、サイクリングだ。

2008年、彼らが実行委員となり、ニセコサイクルウィーク

というイベントを立ち上げる。これを皮切りに、毎年さまざまなサイクルイベントを重ねることで、地域住民や観光客がサイクリングを日常的に楽しむ光景が定着していく。

2014年から始まった国際自転車レース「ニセコクラシック」も年々成長を続け(写真3・4)、今年は1500人の定員のうち260人が15カ国からエントリーした外国人選手だったという。

「しかしスキー場が賑わうホワイトシーズンには60以上の国から富裕層が訪れています。オーストラリア、アジア、ヨーロッパ、それ以外の地域がそれぞれ25%ぐらいの割合でしょうか。スキーインストラクターとして働いている外国人だけでも600人はいる。インバウンドが地元を与える経済効果は計り知れません。だからこそ、今世界中でブームが到来しているサイクリングも、スキーと同様に付加価値を磨き、彼ら呼び込める事業に成長させていく好機なんです」



写真3・4 ニセコ連山や羊蹄山、尻別川など景観も楽しみながら、初夏のニセコを疾走する自転車ロードレース「ニセコクラシック」

動き出した北海道の自治体

スキー事業で培ってきた知見を活かし、ニセコのサイクルツーリズムを盛り上げてきた高橋さんは、これまでに岩手や香川、福岡、長崎など国内各地の自治体でサイクリングによる地方創生のプロデュース事業やインバウンド向け観光プロモーション事業などに数多く携わってきた。

さらに、2012年には出身地である美唄市でも市長に働きかけ、空知でのサイクルツーリズムを提案。

「美唄を含む空知地方は、サイクリングに適した平らな地形であり、ヨーロッパにも似たワイナリーが点在する田園風景が広がっています。まさに自転車で駆け抜けるにはもってこいの環境ですよ」

翌年、サイクルツーリズムそらち推進連絡会を近隣市

町村と連携して立ち上げ、2014年には空知管内を走り抜けながら道産グルメも満喫できるサイクリングイベント「そらちグルメフォンド」の初開催へとつながった。同イベントはその後も毎年規模を拡大しながら、道内外からのサイクリスト達を空知に集結させている。

また、美唄市では2017年より始まったサイクリングイベント「びばいカントリーライド」(写真5)や、サイクリストが気軽に立ち寄って休憩し、地域住民との交流ができる「びばいサイクルポート」(写真6)の市内各所での設置、自分の部屋に自転車を持ち込める宿泊施設(写真7)の開設など、自転車をビジネスチャンスにつなげるプロジェクトが好発進している。

「昨年は空知エリア、富良野・美瑛、札幌、ニセコ、十勝、知床などの観光サイクリングガイド事業者やサイクリングクラブと共に北海道サイクルツーリズム推進協会を設立しました。安全で安心なサイクリングツアーやイベントを開催するためのノウハウを共有し、ツアーガイドの人材育成事業にも力を入れています。



写真5 宮島沼やアルテピアッツァ美瑛、田園風景などを満喫しながら美瑛市内70kmを一周する「びばいカントリーライド」。初心者向け35kmコースもある

そんな中で今年、大きなニュースだったのは、鈴木直道知事が4月の就任後、さっそく7月にシンガポールで自転車を含む北海道観光の海外トップセールスを行ったことでしょうか。サイクルツーリズム振興に北海道もいよいよ大きく動き出したという期待感で胸が膨らんでいます」



写真6 美瑛市内各所に設置された「びばいサイクルポート」



写真7 宿泊室内にサイクルラックを設置した「びばの湯ゆ〜りん館ANNEX」

『ジャパンサイクリング』ブランドの共有を

昨年末、国土交通省では自転車活用推進計画に基づき、日本を代表するサイクリングルートについて国内外へPRを図るため、ナショナルサイクルルートの創設を検討し始めた。高橋さんはその検討小委員会の委員も務めている。

「今や自転車でのまちづくりを推進する協議会が全国で動き始めています。日本のサイクルツーリズムをリードするしまなみ街道や、富士山周辺、沖縄、小豆島、琵琶湖、霞ヶ浦など、それぞれが魅力的なサイクルルートを設定してPRしていますね。今年3月には愛媛県今治市、広島県尾道市、滋賀県大津市、沖縄県名護市がサイクルツーリズムに関する連携協定を締結。Youtubeにてジャパンサイクリング ゴールデンルートと題したプロモ-

ーション映像を公開しました(写真8)。しまなみ海道、琵琶湖一周、沖縄サイクリングの3ルートが美しい映像と共に紹介されています。

全国を走って個人的に面白かったのは、飛騨里山サイクリングでしょうか。古い町並みや農村風景、里山の美しさを走りながら目で楽しみ、合掌造りの古民家にお邪魔させてもらって話を聞いたり、人々の営みや歴史を学ぶことができるツアーに仕立てており、インバウンドにも人気があります。

それぞれの地方にそれぞれの良さがあり、気候風土や食文化の違い、四季によって異なる景色などを楽しむことができる。これぞ自分のペースで気ままに走れるサイクルツアーの醍醐味ですよ。交流人口が増え、地域

経済も活性化する。観光だけではない、地方創生につながるあらゆる可能性を無限に秘めている訳です。

これらサイクルツーリズムをリードし、インバウンドを呼び込もうとしている地域は、各自がバラバラに動くのではなく、みんなで手を取り合い、『ジャパンサイクリング』という一つのブランドで世界戦略を共有しながら、連携していくことが必要になると思います。

そのためにも、ガイド事業者の人材育成が急務です。中でもインバウンドを受け入れるためのガイドは各地域で

足りていません。グローバルスタンダードでのサイクルツーリズムで求められる英語ガイドやコンシェルジュがもっと必要でしょうし、富裕層を相手にする場合は語学やマーケティング、リスクマネジメント、ホスピタリティなどあらゆる面で高い能力を持つ人材が必要となるのは確かです」

一過性のブームに終わらせず、発展的かつ持続可能な観光コンテンツとしていくためには、国内・海外ツーリストとのコミュニケーション能力はもとより、きめの細かい対応力を磨くことが、これからの鍵となりそうだ。

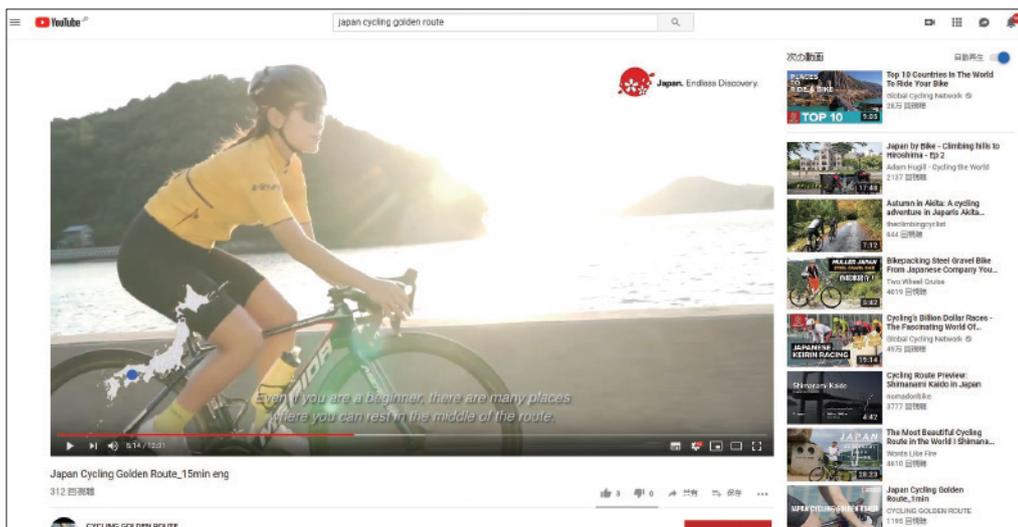


写真8 海外のサイクリストに向けて、Youtubeで公開されている「ジャパンサイクリングゴールデンルート」のPR動画

サイクルルートと道路環境

国内各地はもとより、海外のサイクルルートも走破してきた高橋さんから見て、北海道の道路環境はサイクリストにとってどのような課題があるのだろうか。

「自転車に乗っていて気になるのは、油断した時に転倒しそうな段差やひび割れでしょうか。北海道の場合は雪で道路が傷んだり、除雪で白線が消えたり、側溝のグレーチングがはずれていたりといったことがよく起こります。凍上によるクラック(ひび割れ)も多い。このクラックが縦割れだった場合、僕らの自転車はタイヤ幅が3センチもないので、ハマったりすると転倒の危険があります。できればサイクリングルートとして推奨する道路は優先的に舗装し直してほしいところです。

もちろん、その場合は両車線とも実施する必要はないんです。サイクルツーリズムは左回りが基本ですから、左側のレーンだけでもいいんです。

実は自転車イベントのルートになっている道路は行政の方でも優先して直す傾向があります。ですから沿線の

住民の方にも、イベント中に道路が封鎖になるのは不便ながら、道路がきれいに直るならありがたい、と受け入れて頂きやすい。

サイクルツーリストと地元住民との道路の共有は難しい問題もありますが、最も声を大にしてお伝えしたいのは、道路は観光客のために整備するのではなく、そこを日常的に利用する住民の方が安全に使える道路であってほしいということ。それを僕らがツーリズムで使わせてもらえば十分だと思っています」

加えて、自転車に対する認知度が国内ではまだまだ低いことも実感しているという。

「自転車活用推進法が出来たことや、自転車条例、自転車案内標識も一般にはまだまだ知られていません。ヘルメットや自転車保険の必要性も今ひとつ浸透しておらず、自転車事故の報道も自動車に比べるとかなり少ない。道路には税金が使われている訳ですし、もっと興味を持ってもらえたらと願っています」